

第3回中間報告

(2015年3月23日～2015年6月23日)

国際ロータリー第2710地区
2014-2015年度グローバル補助金奨学生
宗盛千枝

1. 報告書提出日：2015年7月1日 第3回報告
 2. 基本情報
 - ・氏名：宗盛千枝
 - ・派遣ホストクラブ及びカウンセラー：呉ロータリークラブ、神垣和典様
 - ・受入ホストクラブ及びカウンセラー：The Rotary Club of Pocklington & Market Weighton, Mr. David Hirst
-
- ・教育機関、専攻分野：The University of York, Post-war Recovery Studies

ヨークでの生活について

無事にウガンダでの 2 か月に渡るワークプレイスメントを終え、ヨークに戻ってきた 5 月上旬から早 2 か月が経とうとしています。午前 4 時半の日の出から午後 9 時の日の入りまで、人々が一日中日光浴にいそしむ季節になりました。まだ朝晩は肌寒い毎日ですが、これまでよりも明らかに晴天の日が多くなってきました。街のあちこちに花があふれ、どこを散歩しても美しい景色を見ることができます。短い夏を存分に楽しむヨークの人々の気持ちがわかる瞬間です。



昨年初めてヨークに来てから現在まで、怒涛の学業生活を送ってきた私は、ヨーク内はもちろん周辺の他都市をゆっくりと観光する時間をあまり持てませんでした。しかしウガンダから帰国後は、授業もなく、これまでとは打って変わって自由な時間の使い方をすることができます。修士論文の執筆に励みながら、残すところ一か月あまりとなったイギリス滞在の最後に、どこに旅行しようか考えるのが楽しい毎日です。

学業面での成果

第 2 回中間報告では、ウガンダはグルでのワークプレイスメントが始まった時点でのインターンシップの活動計画を報告しました。本報告では 5 月上旬までの滞在で実際に行った活動について報告します。

当初計画していた主な活動は三つ。第一に、ワークプレイスメント先の団体である Refugee Law Project (RLP) のスタッフのフィールド調査に同行すること、第二に、修士論文のテーマである”性暴力被害を受けた男性を支援対象としたプロジェクトデザインと女性被害者を対象としたプロジェクトデザインの比較”に関する情報収集を行うこと、第三に、母校・立命館大学の先生との共同論文の基礎となる情報収集を行うことでした。

第一については、ちょうど私がワークプレイスメントをした時期が RLP の報告書作成時期（プロジェクトの終盤に、ドナーや支援者に対して報告書を作成する期間）と重なってしまったため、期待していたほど多くのフィールド調査に同行することはできませんでした。しかし、同行することができた二つの調査からは、多くを学ぶことができました。

フィールド調査の目的は、以前に団体が医療支援やカウンセリング支援を行った男性性暴力被害者に対して、その後の経過を観察し、さらに必要な支援を見極めることです。医療支援の場合は術後の経過が順調かどうか、またカウンセリングの場合は夜きちんと眠れているか、無気力状態が続いていないかなどを本人や家族へのインタビューを通して調べます。ここでは、同僚であるウガンダ人スタッフから、多くのカウンセリングスキルを学ぶことができました。インタビューに入る前の本人を含む家族全員との雑談で空気を和ませること、デリケートな問題を話す際の本人への配慮の仕方、受益者の孫が着てい

る服の汚れ具合・体の大きさから家族の経済状況などを推し量ることなど、カウンセリングをする際に考慮すべきことを彼の後姿から教えてもらいました。

実際に私が同僚に同行してフィールドで行ったことは、受益者がカウンセリングを受けている傍で彼の家族と町で売るためのピーナッツの皮を剥くことだけでした（カウンセリングは現地語で行われ、かつプライベートな話題を含むため、私はカウンセリングに同席しない方がよいだらうとの同僚の判断です）。しかし、ピーナッツの皮を剥きながら雑談をすることによって、生活の状況を含む多くの情報を得られることがわかりました。観察眼とコミュニケーション能力がいかに大切か、改めて痛感する機会となりました。

第二の修士論文に関するデータ収集では、プロジェクトデザインの相違点、共通点を見つけだすことを念頭に、男性性暴力被害者を支援する団体（RLP）と女性性暴力被害者を支援する団体（他の NGO）にインタビューを行いました。女性を支援する団体に関しては、インタビューに協力してくれた団体のスタッフがとても親切で、小分けに行ったとはいえ合計で 4 時間にわたるロングインタビューに協力くださった方もいました。その結果、4 団体に対して、とても中身の濃いインタビューを行うことができました。

男性を支援する団体でありワークプレイスメント先でもある RLP でのインタビューが最も難航したと言えるかもしれません。アポイントメントの時間に担当者が来ない、音信不通になることなどしょっちゅうで、6 時間のバス旅を経て首都の本部オフィスまでインタビューに来ていた私にとっては、インタビューの実施自体が骨の折れるものでした。結局、話を聞いたかった人には十分な面会時間をもらえず、イギリス帰国後に、同僚から紹介してもらって他の人からメールでインタビューを行うことになりました。スケジュールに余裕をもって調査すること、複数の協力者を見つけることなど、フィールド調査に関するリスクマネジメントに関して多くの学びを得たと言えます。男性性暴力被害者を支援している数少ない団体である RLP に対して十分なインタビューを行えなかったことは痛手ですが、今あるデータを最大限に使って論文を書くことも、研究者として必要な力だと前向きに考えています。

第三の共同論文に関するデータ収集は、自分の論文に必要なデータ収集に忙しい合間を縫うように、駆け足でインタビュー調査を行い、結局 2 つの団体からデータを得ることができました。私が現地でイ



（フィールド調査にて。受益者にカウンセリングを行う同僚と、傍で彼の家族とピーナッツの皮を剥く私）

ンタビュー先探しとインタビューの実施をする一方で、日本にいる立命館の先生はインタビューの書き起こしをするという、完全な分業を行いながらの作業となりました。

ワークプレイスメントで得たデータを使って、現在は9月上旬の締め切りを目指して修士論文を執筆しています。カウンセリングスキルを教えてくれた RLP のスーパーバイザーや、ヨーク大学のスーパーバイザーからアドバイスを受けながら、学業生活の集大成とし



（ボダボダと呼ばれるバイクタクシー。ほぼ毎日乗りました）

て満足のいく論文を書けるよう励んでいます。

受入地区でのロータリーとの関わり、奉仕活動、カウンセラーとの交流

カウンセラーの David Hirst 氏には、本当にお世話になっています。ヨークの歴史に造詣の深い彼がガイドする歴史ツアーに、ロータリアンに混じって私も参加させていただいたり、週末に彼のヨークおすすめスポットに連れて行っていただいたりしました。残り少ないヨーク滞在期間を存分に満喫できるようにとの心遣いに、大変



(左端：ヨーク歴史ツアーをガイド中の David さん)



(6月23日 The Rotary Club of Pocklington & Market Weighton の定例会にて)

感謝しています。私が仏教徒であることを知り連れて行ってくださった英国スタイルの仏寺が最も印象に残っています。

David さんが所属する The Rotary Club of Pocklington & Market Weighton の6月23日定例会にて”Another Side of Japan”のタイトルの元、日本の文化を紹介するプレゼンテーションをさせていただきました。一般的に「日本文化」として海外に知られているものと言えば、相撲や寿司、カラオケなどがありますが、今回はそうしたものと趣旨を変え、クレヨンしんちゃん一家のある一日を紹介する中で、

ビジネスシーンにおける名刺や様々な角度のお辞儀の意味、ママ友、キャラクター弁当、プリクラ、半顔メイク、給食、お受験競争などについて話をさせていただきました。終了後は多くの質問をいただき、あまり知られていない日本の文化について少しは興味を感じていただけたと思います。

直面した課題、問題点等

大きな問題ではありませんが、すべての授業が終わり修士論文を執筆するのみとなった現在、時間と気分を持て余し気味なことが挙げられます。気分転換がうまくできず、長時間机に向かっている割にあまり執筆が進まず、さらに気分が落ち込む悪循環に陥りがちなのです。そのため、積極的に休憩をとることができる新鮮な気持ちで論文に取り組みたいという思いから、かつてより興味のあったチェロとギターの練習とヨガを始めました。今後、ランニングや切り絵にも挑戦しようと考えています。行き詰ったときには思い切って休憩をとって、楽器を弾いてリフレッシュを図るよう心掛けています。どんなことをしたら気分転換になるのか、「自分の扱い方」を知ることができつつあると感じています。これは将来フィールドで働くことになった場合にも役立つ経験だと前向きに考えています。ショッピングや映画などができない環境、つまり外に娯楽を求めることができない環境にある場合、身一つで気分転換を図る術を身に付けておくことは、精神的



な健康を保つために必要なことだと言えます。

論文を楽しんで書くことができないことも、課題の一つと言えるでしょう。指導教官からは、一つのテーマについて数か月考え続けることは人生のなかでそうそうない経験だから楽しむようにと言われてましたが、実際に論文を書いていると、多少、飽きてくるのも事実です。そういう時は、書いている論文が将来に渡って関わりたい分野に関するものであることを思い出すようにしています。つまり、卒業後、男性に対する性暴力に関して仕事をする際に、この論文がどのように生かせるかを考えながら書くようにしています。逆を言えば、自分の将来に役立つような論文を書くことを心掛けるようにしています。

今後の課題、目標

納得のいく修士論文を書き上げることに尽きます。これまで提出した課題のなかには、採点結果は別として、課題への取り組み方に悔いが残るものもありました。自分の能力と費やせる時間を判断して限られた時間内で形にする・結果を出す能力が未熟であったことが原因です。この留学の集大成ともいえる修士論文では、結果がどうであれ、限られた時間と能力の中で全力を尽くしたと言い切れるような論文を書き上げる覚悟です。